

## 「媒介的知識人」とは何か

著者	山 泰幸
雑誌名	災害復興研究
号	11
ページ	83-91
発行年	2020-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/00028775">http://hdl.handle.net/10236/00028775</a>

## 《論文》

## 「媒介的知識人」とは何か

山 泰幸\*

## 要約：

長期密着型のフィールドワークと詳細なエスノグラフィー（民族／民俗誌）を得意とする人類学や民俗学の領域においても、頻発する大規模災害の被災地を対象とした研究が蓄積されている。特に、東日本大震災以降、人類学・民俗学による社会貢献の一つの形として、被災者や被災地を支援し、エンパワメントする有効な手法との認識のもとに、被災者・関係者との「協働」をともなったエスノグラフィックな調査研究の挑戦的試みが行われるようになっていく（関谷・高倉 2019）。「協働」をともなったエスノグラフィックな調査研究という手法は、人口減少・少子高齢化が急激に進行し、過疎化が深刻化している地域における地域復興やまちづくりの実践においても、十分に有効であると考えられる。

筆者は、災害および過疎からの事前および事後の地域復興をテーマに、現地の役場職員や住民有志と「協働」しながら、一方では、地域復興・まちづくりの活動に外部支援者として実践的に関与し、他方では、エスノグラフィックな調査研究の一環として、約 10 年以上にわたり現地とのかかわりを続けてきた。

その過程で気づいたのは、地域復興やまちづくりの現場には、必ずと言っていいほど、特徴的な性格をもった担い手が存在している点である。私は、このような担い手を「媒介的知識人」と名づけている。外部支援者である研究者が、その支援を可能にするためには、地域のなかの「媒介的知識人」を発見し、彼らと「協働」することが、きわめて有効であり、むしろ必須の条件であると考えようになった。

本稿では、約 10 年以上にわたる、筆者の「協働」をともなったエスノグラフィックな調査研究の取り組みから、「媒介的知識人」について再検討し、いくつかのタイプを提示する。さらに、地域復興やまちづくりを効果的に進めていくためには、「媒介的知識人」を発見し、彼らの活躍の場を設けて、彼らの知識や技術を引き出し活かすことが、研究者のような外部支援者の重要な役割であることを主張する。さらに、そのための有効な方法として、筆者が運営している「哲学カフェ」の取り組みを紹介する

キーワード：媒介的知識人、協働のエスノグラフィー、地域復興、まちづくり、哲学カフェ

\*関西学院大学 人間福祉学部 人間科学科 教授

## はじめに

長期密着型のフィールドワークと詳細なエスノグラフィー（民族／民俗誌）を得意とする人類学や民俗学の領域においても、頻発する大規模災害の被災地を対象とした研究が蓄積されてきている。特に、東日本大震災以降、人類学・民俗学による社会貢献の一つの形として、被災者や被災地を支援し、エンパワメントする有効な手法との認識のもとに、被災者・関係者との「協働」をともなったエスノグラフィックな調査研究の挑戦的試みが行われるようになっていく（関谷・高倉 2019）。

「協働」をともなったエスノグラフィックな調査研究という手法は、人口減少・少子高齢化が急激に進行し、過疎化が深刻化している地域における地域復興やまちづくりの実践においても、十分に有効であると考えられる。

過疎化が深刻化する地域が、自らの弱点を認識し、克服しながら、同時に、来るべき災害に事前に備えていくには、どのようにすればよいだろうか。また、このような地域が被災した場合、地域の存亡にかかわる事態になることが予想される。そのようななか、被災した地域はどのように再生し、復興していけばよいのか。過疎をくもう一つの災害ととらえるならば（岡田 2015）、事前と事後の二重の災害復興の取り組みが求められる。

私は、以上のような災害および過疎からの事前および事後の地域復興をテーマに、以下に紹介するように、現地の役場職員や住民有志と「協働」しながら、一方では、地域復興・まちづくりの活動に外部支援者として実践的に関与し、他方では、エスノグラフィックな調査研究の一環として、約10年以上にわたり現地とのかかわり続けてきた。

その過程で気づいたのは、地域復興やまちづくりの現場には、必ずと言っていいほど、特徴的な性格をもった担い手が存在している点である。以前の論考において、私は、このような担い手を「媒介的知識人」と名づけた（山 2013）。その後、いくつかの論考等（山 2015；山・関谷 2019）などでも、この概念を取り上げて研究を重ねてきた。

私は、外部支援者である研究者が、その支援を

可能にするためには、地域のなかの「媒介的知識人」を発見し、彼らと「協働」することが、きわめて有効であり、むしろ必須の条件であると考えられるようになった。

この小論では、約10年以上にわたる、地域復興・まちづくりの実践的研究の取り組みから、「媒介的知識人」について再検討し、いくつかのタイプを提示する。さらに、地域復興やまちづくりを効果的に進めていくためには、「媒介的知識人」を発見し、彼らの活躍の場を設けて、彼らの知識や技術を引き出し活かすことが、研究者のような外部支援者の重要な役割であることを主張する。また、そうした実践自体が、研究者と地域や住民との「協働」であり、同時に、「協働」をともなったエスノグラフィックな調査研究の要であり、その必須の条件となると考えられるのである。

## 1 協働のはじまり

ここで一つの事例の概略を紹介したい（山 2010）。私は2009年より徳島県西部に位置する東みよし町（2006年に旧三好町と旧三加茂町が合併）にて、現地の役場職員や住民有志と協働しながら、まちづくりの実践的研究を行ってきた。この町の真ん中を、吉野川が流れており、北側の山間部（旧三好町）に位置する法市集落<sup>ほういち</sup>は、2009年7月末現在で、戸数は15戸で29人であったが、現在は、その7割ほどになっている。

通常、民俗調査は、教育委員会や自治体史編纂委員会などが窓口となり、地元の郷土史家や教員が対応する場合が多い。しかし、この調査は、企画課を中心とした役場の各部署の若手職員の混成チームである「まちづくり戦略プロジェクトチーム」が対応した。彼らは合併後の新しい町をつくるためのプロジェクトの一環として、私たちの民俗調査を受け入れたのである。このことは、学問的価値のみに根拠を置いて遂行してきた民俗調査に対して、その外在的価値すなわち、まちづくりにおいて有している価値をあらためて認識させることになった。

さらに、役場職員や住民有志との交流を通して、大学や研究者に対する彼らの期待がどこにあ

るのか、自分に何が求められているのかについても考えさせられることになった。また、研究者である自分にできることは何かを考えるようになった。何よりも、彼らの地域に対する思い、まちづくりに対する熱意に触れて、「意気に感じて」、彼らと「協働」して、その後、約10年に渡り、まちづくりに実践的に関与していくことになった。

私がまず取り組んだのは、関西学院大学内の研究支援メニューの一つである特定プロジェクト研究センター制度を利用して、「観光学・まちづくり研究センター」を設置したことである。これは期限付きではあるが、大学内の正式な研究組織である。東みよし町を研究センターの地域再生・まちづくり研究のモデル地区に指定して、研究を開始することになった。

このセンターを設立した理由は、役場の各部署の職員有志の混成チームである「まちづくり戦略プロジェクトチーム」が若手職員中心であり、さまざまなアイデアを構想し、企画を立案しても、必ずしも上層部から許可が下りるとは限らなかったからである。そこで「観光学・まちづくり研究センター」という外部の研究機関からの依頼・要望というかたちで、次々に企画を立案し、実行に移していくことになった。

主な取り組みを列挙すると、最初に、町内の主な産業の視察と企業担当者や個人事業主にインタビュー調査を行った。公共事業が減少し、建設業関連からの業種転換が進んでいることもわかった。また、雇用の場の創出が必要であり、役場は、外部からの企業誘致を目指して動いていたが、ほとんど成果がない状況であった。

そこで町の産業の担い手である商工会の主要なメンバーを一同に招いて会議を開催し、そこから商工会青年部有志を集めての定期勉強会を開催することになった。2カ月に1回程度のペースで続けた勉強会は、まちづくりの担い手の養成につながり、やがて、勉強会のメンバーが「東みよし町まちづくり有限責任事業組合（LLP）」を設立し、町内の経済活動の担い手の一つとして成長することになった。その他、「文化遺産を活かした魅力あるまちづくりシンポジウム」を開催し、文化遺産の保存会など、地域で活動するグループのリーダーを招いて、地域文化資源の発掘に努めた。地

域の夏祭り（大楠祭り）の学生の参加・運営。空き家を改修し、地域の交流拠点「おおくすハウス」を開設。海外自治体との国際交流や阪神地域に町の特産品を販売するアンテナショップを試験的に設置するなど、「あの手この手」で活動を行ってきた。

## 2 媒介的知識人とは

「まちづくり戦略プロジェクトチーム」が民俗調査の調査地として受け入れたのは、防災と芸術祭を組み合わせた独自の地域復興に取り組んでいる法市集落であった。

この集落では、注目すべき、二つの活動を行っていた。この集落は平地と道一本でつながっているため、たとえば、豪雨や豪雪などの災害によって、道路が寸断され、孤立集落化する可能性が高い。そのため、集落の自治会長が、非常時の飲用水の確保のために、貯水タンクを設置した。さらに、彼が、自力で自分の土地を切り開いて、最終的には町役場や県庁、さらに自衛隊の協力まで引き出して、救助用・緊急医療用のヘリコプターが着陸するためのヘリポートを造成していた。

もう一つの活動は、80年以上も使われていなかった、文楽（人形芝居）用の農村舞台を改修し、2003年に人形芝居の復活公演を実現したことである。さらに、人形芝居だけでなく、近隣住民の趣味の音楽グループや阿波踊りのグループも出演する地域芸術祭として、毎年、集落の住民によって開催されている。

芸術祭の開催と防災活動は、担当する役所の部署も違えば、これを扱う学問分野もそれぞれ異なっている。しかし、住民にとっては、どちらも集落を守るという点では同じ目的をもった活動である。というのも芸術祭の表面的な目的は、過疎化が進む集落を盛り上げることにあるが、集落の自治会長の狙いは、集落の近隣地域からやって来る出演者や観光客と縁を作り、災害時に備えて、集落の外部に支援者をつくることにあるからである。彼は、新しい祭りを創出することで、外部とのネットワークを築くための仕組みを作ったのである。

以上からわかることは、学問の分野や役所の部署の分け方で考えるのではなく、地域住民の目線に立って、彼らの活動を総合的に理解して、支援していく必要があるということである。

では、「媒介的知識人」とは、どのような人物だろうか。ここで、これらの活動を企画、実行してきた集落の自治会長のHさんに注目したい。Hさんは、出身者であるため地域に受け入れられやすく、高校卒業後、都会に出て大企業に長年勤務した経験があり、企業勤務の経験から役所と折衝し、有益な事業を探し、書類を作成、申請するスキルがあり、管理職の経験は自治会運営に活かされている。地域の内部と外部を媒介し、有益な情報や資金、人材を外部から調達できる、ある種の知識や技術を持った人物であり、私はこのような人物を「媒介的知識人」と名づけている(山 2013)。

役場や商工会にも、このような人物が存在し、彼らが「媒介」となって、多様な「協働」が可能となったのである。

### 3 「媒介的知識人」の類型 ——型破り公務員型

「媒介的知識人」には、いくつかのタイプがあると考えられる。ここでは、この地域での「協働」の事例をもとに、「媒介的知識人」の類型を整理してみたい。

まず、私を東みよし町に紹介したのは、友人の徳島大学准教授(当時)のIさんである。Iさんは、徳島県や県内の市町村と連携して、財政学の立場からこれまで多くの仕事をしてきており、県の過疎対策関連の委員なども歴任し、県内の市町村の事情に詳しい人物である。Iさんは、東みよし町の行財政改革に携わったことがあり、そのとき、一緒に仕事をした町役場のTさんに話を持ちかけて、大学の研究資源を社会貢献に活かすことを目指して、Iさんのゼミ生たちが町の財政健全化を目的に調査研究をし、政策提言をするという「財政分析プロジェクト」の試みを始めていた。この財政分析プロジェクトの受け皿となったのが、町の若手の職員たちが所属部署を超えて集まった「まちづくり戦略プロジェクトチーム」であった。Iさんが私を東みよし町に紹介したの

は、プロジェクトチームと学生との連携が着実に成果を出してきた時期であった。

この「まちづくり戦略プロジェクトチーム」の実質的リーダー格であったのが、役場職員のTさんである。

Tさんは、地元の高校を卒業し、大阪の大学に進学するが、旧三好町の職員の募集を知り、1年で中退して、役場職員となった。Tさんは、平成の大合併の際、県庁に出向し、市町村合併の仕事に従事する。8町村で構成されていた旧三好郡のうち、6町が合併し三好市が誕生し、残された旧三好町と旧三加茂町の2町が合併して、東みよし町が誕生する。合併のプロセスにおいて、自治体同士の駆け引きや、首長の思惑など、複雑な政治的力学があったことは想像にかたくない。Tさんは、市町村合併の仕事に全力で取り組んだが、最終的な結果を受けて、無念さや悔しさで泣いたという。やがて、Tさんは、東みよし町を他の近隣自治体に負けない、素晴らしい町にすることに全力を傾けることになる。

地方の役場職員の場合、その自治体の出身者であり住民である場合が多いが、Tさんもそのタイプである。また、Tさんは、新しく自治体を作る仕事に携わった経験があるが、これは既存の自治体の職員として既定の業務を担当することとは、質的に大きく異なった経験といえる。自治体を外から眺めて、さらに自治体そのものを制作するという経験をもっているのである。このことは、既存の自治体を前提として、地域活性化やまちづくりの活動に取り組む場合の視点の在り処とは、次元が違っていることは明らかだろう。Tさんは、型破りの公務員として、企業人のようだとしばしば評されるが、以上のような経験をもっていることが、役場職員でありながら、経営者のような感覚を身につけたものと思われる。Tさんは、その後、企画課から産業課に移動となり、企業誘致の担当として、いくつもの企業誘致を成功させている。Tさんの企業人的あるいは経営者のセンスが、企業の担当者として親和性があると考えられる。

さらに、重要なポイントとして、無念さ悔しさから、これをバネにして発憤し、全力でまちづくりに取り組み始めた点である。

「震災バネ」や「復興バネ」という言葉がある



が、これは1995年の阪神・淡路大震災で生まれ、2004年の新潟県中越地震で市民権を得たとされる。被災という辛い経験でくじけるのではなく、逆にこの逆境を糧にして人として成長し、前向きに生きる人たちを理解する言葉である。特に、被災後、復興やまちづくりの活動に積極的に取り組む人たちを理解するうえで重要な言葉である。Tさんが、平成の大合併という、地域社会にとっては、劇的な変化をもたらす歴史的事件を受けて、まちづくりに奔走することになったことを考えると、一種の「復興バネ」が働いたととらえることができる。

私はこれまでいくつものまちづくりの現場を訪れたが、出身者かつ住民で、同時に、型破りの公務員で、かつ地域への特別な思い（復興バネ）を持っている人物が必ずと言っていいほど、活躍していることを見てきた。Tさんもまさにこのタイプに当てはまる。

復興やまちづくりの活動が、地域のなかで、オーソライズされていくためには、このような型破りの公務員が積極的な担い手として参加していることが、非常に大きな意味があると考えられる。特に、重要なポイントは、役場の業務として、いわば堂々と、さまざまなまちづくりの活動を企画し、実行することができるということ、また、このことは、まちづくり活動に専属スタッフが無償で配置されたことに等しく、人的なサポートが得られることが非常に大きい。さらに、適宜、補助金や助成金をはじめ予算的な面でのサポートやアドバイスも得られる可能性がある。

Tさんは、出身者かつ住民であり、公務員であることから、住民と役場を媒介し、かつ型破りな公務員として、町と外部とを媒介する。県内では先駆的取り組みであった大学連携事業を成功させ、企業誘致の実績も積み続けている。Tさんは、役場のなかに存在する「媒介的知識人」ということができる。

#### 4 媒介的知識人の二つのタイプ ——文化人型と実業家型

Tさんが窓口になって、さまざまな企画を協働で実行していったことはすでに述べたが、これら

の活動は大きく二つに分けることができる。一つは、民俗調査に始まった、文化教養系の活動と、商工会青年部有志の勉強会を中心とした商業経済系の活動である。前者に関しては、民俗調査の受け入れの当初から、Tさんは、自分の守備範囲を超えるものと判断し、役場職員の先輩であるSさんに協力を依頼した。

Sさんは、地元出身者で住民でもあり、国立の工業専門学校を卒業後、旧三好町の役場職員となった、真面目を絵に描いたような実直な公務員で、役職や役目をわきまえて、誠実にその務めを果たしてきた人物である。Tさんが型破りな公務員とすれば、Sさんは型にはまった公務員の典型のような人物である。しかし、Sさんは、役場職員としての仕事の外では、じつに多趣味の活動をおこなってきた。書道を趣味として続けており、郷土史研究会のメンバーであり、趣味のギターで高齢者施設に弾き語りのボランティアをしたり、地域の体育団体の役員として、地域のスポーツ活動の世話もしている。また、Sさんは、その実直で誠実な人柄から地域のなかでの人望が厚いことも重要な特徴である。

Sさんは、学術的素養と芸術家気質をもった人物であり、民俗調査の受け入れをきっかけにして、その後、私の紹介などにより、多様な分野の多くの研究者が続々と町を訪問するようになったが、彼らの学術的な要望に対応する、まさに地元知識人として活躍することになった。Sさんも、その意味で、媒介的知識人と呼ぶに相応しい人物ということができる。

しかし、Sさんのこのような活動が本格的になるのは、Sさんが役場を早期退職（2013年3月）してからである。当時、Sさんは役場職員としてはトップの役職に就いていただけに、この決断は周囲を驚かすことになった。Sさんもまた、Tさんと同様に、合併後の新しい町の役場で働くなかで、苦悩や葛藤があり、実直で真面目な公務員であるからこそ、責任感から来る精神的負担や、また役場職員という立場に拘束されて、気持ちはあってもできないことも多く、今後の人生について熟慮した結果、早期退職を決断したのである。

一方、Tさんの紹介で、商工会青年部有志の勉強会など、商業経済系の活動を一緒に続けること

になったのは、商工会長であったMさんである。Mさんは、旧三加茂町の出身で大学進学で地元を一度離れたが、卒業後に、父親の代に始めた建設会社の後を継いだオーナー社長である。41歳の若手でありながら商工会長になった人物で、徳島県全体の商工会青年部の会長も経験している。地元経済界の中心人物といえる。Mさんもまた地域への思いが強く、私財を費やしなが、まちづくりの活動に取り組んできた。大楠祭りの世話人であり、私財を投入して、空き家を改修して「おおくすハウス」をオープンしたのも、Mさんである。Mさんもまた、大学の研究者である私と積極的に協働しながら、さまざまな活動を行ってきた点で、「媒介的知識人」としての側面をもっている。

Mさんの場合、重要なポイントは、地域の特産品づくりをはじめとして、地域産業の育成や新規ビジネスづくりなど、地域経済の活性化を目的としたまちづくりへの関心が一貫している点である。その関心から、商工会青年部の勉強会も、メンバー集めから、運営のための金銭的な負担までしながら、積極的にサポートを続け、地域経済を担う人材育成にも貢献してきた。

媒介的知識人には、Sさんのような文化人型と、Mさんのような実業家型の二つのタイプがある。地域への思いが強い点や、自分が居住する地区や集落だけでなく、より広い範囲でのまちづくりに関心をもっている点で、Hさんのようなタイプとも異なっている。これは、Sさんが役場職員としてトップの役職を経験していること、またMさんは商工会長として、町全体の経営者を代表する役職に就いたことも関係している。

すでに述べたように、私はこれまでいくつものまちづくりの現場を見てきたが、媒介的知識人には、文化人型と実業家型の二つのタイプが必ずと言っていいほど存在し、関心事や価値観、アプローチが対照的であるため、距離があるものの、地域への思いが強く、まちづくりへの関心がある点では共通しており、地域の外部に対しては、基本的には協力して対応する関係にあることが多い。ちょうど楕円の二つの中心のように距離を取って、ゆるやかにつながっているイメージである。SさんとMさんの場合も、このようなケース

に当てはまる。こうした背景には、Mさんの住む旧三加茂町の中心部が商業地域で都会的であるのに対して、Sさんの住む旧三好町は基本的に農業地域であることも関係している。しかし、こうした二つの楕円の中心は、どのような地域のまちづくりの現場でも、大なり小なりみられるものではないかと考えられる。ただし、どちらの楕円が主流であるかによって、主流の側の媒介的知識人は目立った活躍をし、そうでない方の媒介的知識人は活躍が得られず、潜在化している可能性が高いと思われる。文化教養系と商業経済系、これら二つの活動のうち、どちらの活動が主流なのか、あるいは両者がどのような関係を築いているかによって、地域復興やまちづくり活動の性格が変わってくると、私は考えている。

以上、四つのタイプの媒介的知識人について紹介してきた。Tさんのような役場職員の立場から、町の事業としてまちづくり活動をオーソライズし、積極的に支援するタイプが一方で存在し、他方でHさんのように自分の居住地区・集落の維持・再生に専念するタイプが存在する。これに加えて、個別の地区や集落を越えて、より広く町全体での文化教養系の活動を重視するSさんタイプと、商業経済系の活動を重視するMさんタイプがある。Hさんの場合は、その後、農家民泊事業を手がけるようになるが、ヘリポートや地域芸術祭なども合わせて、Hさんの活動全体をみると、小さな集落ながらも、Hさんは、すべてのタイプを兼ね備えているようにもみえる。

一方、特定の地区・集落を超えて、町全体を視野に入れて活動をしているSさんやMさんの場合は、その点でTさんとも共通している。また、Hさんと比較すると、活動範囲が広範になることで、関心や持ち味によって、文化教養を重視するタイプと商業経済を重視するタイプに専門分化が進んだ結果とみることもできる。というのも、Sさんの場合、卒業後、役場に就職する前に、しばらく家業の豆腐屋を手伝っていた経験があり、また役場を退職後に、農業を始めて農産物の販売を始めるなど、商売人気質も備えている。一方、Mさんの場合は、空き家をお洒落なカフェ風に自らデザインしてリフォームし、「おおくすハウス」として再生させて、さらに、私のゼミと大阪のデザ

イン専門学校と共同で、「おおくすハウス」のイメージキャラクターを制作して、これを活用して、文具などの商品を開発している。Mさんもまた芸術家気質も備えているのである。媒介的知識人を、文化教養を重視する文化人型と、商業経済を重視する実業家型とに分けてみたが、両方の性質を少なからず兼ね備えているのが実際のところであり、両方の性質を見事に統合して活躍している媒介的知識人も当然あり得るだろう。

また、Sさんの活動の特徴として、趣味的な縁、趣味的な要素をもった集まりをいくつも世話をしている点が注目される。このことがHさんのように居住する地区・集落に限定した活動ではなく、Sさんの活動が広範囲になっている理由の一つと考えられる。

まちづくり活動における趣味の縁あるいは、趣味的な要素は、媒介的知識人の「媒介力」を考えるうえで、重要なポイントと考えられる。

## 5 外部支援者の役割

まちづくりが活発な地域には、「媒介的知識人」が必ず存在していると私は考えている。住民だけでなく、役場や商工会などの組織のなかにも、少なからず「媒介的知識人」は存在している。逆に、まちづくりが活発に行われない地域は、「媒介的知識人」が存在しないか、存在していても、彼らに活躍の場がないからと思われる。なぜなら、彼らは地域では、「風変わりな人物」と考えられており、しばしば敬遠される傾向にあるからである。

外部から訪れる研究者は、「媒介的知識人」を発見し、彼らの知識や技術を引き出し、活躍の場を設けて、彼らを理解し支援する協力者を見つけ出すなどの活動を通じて、彼らを支援することが重要な役割であり、これが同時に、外部支援者と地域や住民との「協働」を可能にする必須の条件と考えられる。

では、「媒介的知識人」はいかに発見すればいいのか。2013年4月から1年間、私はパリに滞在したが、そこで知ったのが、「哲学カフェ Café Philosophique」である。毎週日曜日の朝に、喫茶店に人々が集まって、コーヒーを飲みながら、自

由にいろんなテーマについて議論をする。誰でも自由に参加が可能であり、どこの誰であるか名乗る必要もない。しかし、哲学カフェにも、一定のルールがある。話したい人は、どんな意見を言ってもかまわないし、話したくない人は話さなくてもよく、聞くだけでもかまわない。また、他の人の意見を批判してもいいが、否定してはならない。これは相手に敬意を示すということである。また、何か一つの結論を出す必要もないし、合意を形成して運動をするということもない。いろんな意見があることを参加者が共有するだけである。

私は、哲学カフェが、まちづくりに役に立つと直感し、帰国後、Sさんの協力を得て、私が司会者として、2015年から3カ月に1回のペースで、旧三加茂町側の商業地域にある喫茶店を借りて、現在まで継続して開催している。

哲学カフェが興味深いのは、地域のなかに潜在している「地元知識人」とも呼ぶべき人びとが集まってくることである。これは決して、学歴が高いことを意味しない。日頃は、交流がなく、お互いに知らなかった、地域の知識人たちが、ここで出会って、お互いの存在を知るようになる。単に知るようになるだけでなく、発言や議論を通じて、敬意をもって互いの存在を認識するようになるのである。

また、ここには、行政の職員や学校の先生など、地域で重要な役割を担っている人もいれば、日頃、「風変わりな人物」と見なされている人たちも、集まってくる。しかし、ここでは、決して排除されることはない。ここが、「媒介的知識人」と、「媒介的知識人」を支援可能な人々との出会いの場になっている側面もある。

さらに、重要な点として、一つのテーマをめぐって、自分の意見を述べたり、他の人の意見を聞いたりしながら、充実した時間になるように参加者が一緒に協力し、その場を築いていくことを通して、場づくりのためのコミュニケーションの作法を習得する場にもなっているということである。

この哲学カフェの活動を通じて、場づくりのためのコミュニケーションの作法を習得した人たちが、さまざまな地域活動を展開するようになってきている。これについては、あらためて論じるこ



とにするが、この意味で、私は、哲学カフェを、コミュニティを生み出すための「コミュニティ再生細胞（ips細胞）」の培養施設のようにとらえている。

## 6 おわりに

媒介的知識人にも、地域ごとに、その質と量に、濃淡があると私は考えている。歴史的な背景として、城下町か宿場町か、あるいは農村か漁村かでも随分違いがある。また、江戸時代以来、教養層の厚みが伝統的にある地域もあれば、UターンやIターンなど外部の経験をもった者を受け入れて、媒介的知識人をうまく補充している地域もある。たとえば、一口に「過疎地域」といっても、地域ごとに随分と背景が違っており、人材の厚みが違っているのである。媒介的知識人を生み出す、それぞれの地域の社会的・思想的背景も合わせて解明していく必要があるだろう。

また、地域復興やまちづくりにかかわる研究者をはじめ外部支援者は、地域内部の媒介的知識人と連携し、これをサポートするだけでなく、自分以外の外部支援者との連携にも十分な配慮が必要と考えられる。この小論では、詳しく紹介しなかったが、私は多くの多様な分野の研究者を町に案内し、紹介してきたが、地域復興やまちづくりは、一つの分野の研究者が関与するだけで歯が立つような問題ではなく、地域内部の住民や媒介的知識人だけでなく、地域にかかわりをもつ多様な外部支援者たちの、その知恵や技術を結集し、総合することによって、道が切り開かれると考えるからである。そのための場づくりもまた研究者としての外部支援者の重要な役割であるとする。特に、長期密着型のエスノグラフィックな調査研究を得意とする人類学者・民俗学者に適した役割と考えられる。

以上、媒介的知識人について検討した。強調しておきたいのは、ここで取り上げた取り組みのほとんどが、媒介的知識人との「協働」をともなった、長期密着型のエスノグラフィックな調査研究によって、初めて成立しているという事実であ

る。その意味で、最後に、「協働」のエスノグラフィックの有効性を確認しておきたい。

## 参考文献

- 岡田憲夫, 2015, 『ひとりから始める事起こしのすずめ——地域（マチ）復興のためのゼロからの挑戦と実践システム理論 鳥取県智頭町30年の地域経営モデル』関西学院大学出版会。
- 関谷雄一・高倉浩樹編, 2019, 『震災復興の公共人類学——福島原発事故被災者と津波被災者との協働』東京大学出版会。
- 山泰幸, 2010, 「千年の大クスに学べ——徳島県東みよし町まちづくりプロジェクト」『BIO City』（45）：120-125。
- 山泰幸, 2013, 「中山間地における孤立集落の事前復興の取り組み——徳島県西部の事例から」『災害復興研究』（5）：35-38。
- 山泰幸, 2015, 「災害に備える村の事前復興の試み——徳島県西部中山間地の事例から」『年報 村落社会研究』（51）：150-182。
- 山泰幸・関谷雄一, 2019, 「災害と向き合う協働の民族／民族誌——長期密着型フィールドワークの効果と課題」『日本災害復興学会2019年度鳥取大会予稿集』17-18。

## 付記

本稿は、科学研究費補助金基盤研究（B）（課題番号15H03421）、科学研究費補助金挑戦的萌芽研究（課題番号15K13103）、関西学院大学2019年度個人特別研究費の研究成果の一部である。

# What Is an “Intermediate Intellectual”?

Yoshiyuki Yama

Many small communities in mountainous areas are rapidly aging and becoming depopulated. Also, most communities in these areas have a high risk of serious damage in the event of a natural disaster. Appropriate measures should be taken before any disaster occurs for revitalizing the community in these areas, focusing on facilitating the post-disaster recovery process.

This study aims to identify the advantages of long-term fieldwork and collaborative ethnography for reducing risk and revitalizing the community before a disaster occurs in these areas. In particular, I focus on talented community members, who have knowledge and skills to mediate between in and out of the village and mobilize useful information, knowledge, funds, and human resources from out of the village. I named such kind of people as the “intermediate intellectual.” We can always find several types of intermediate intellectuals in activities of the community revitalization.

This study also focuses on significant roles of researchers who carefully find intermediate intellectuals in the local community and create a place to encourage them to work actively. Because these intermediate intellectuals are often regarded as strange people, there is no place or opportunity to show their ability.

Finally, this study introduces the “Café Philosophique” that I hold regularly, one of the useful methods for researchers conducting collaborative ethnographic researches.

## **Keywords:**

intermediate intellectual, collaborative ethnographic research, revitalizing community, community building, Café Philosophique